「寺町のまちづくりを考える会」とは

私たちの会は、平成五年初め、朝日町十字路付近の若手経営者たちが中心となって結成しました。この会の目的は、松江市郊外の住宅地、商業施設の隆盛を横目に見ながら、そうした勢いと反比例するかのように、日々寂れていく中心部（特に寺町周辺）のあり方について考えるものでした。そして、それと同時に、官民の相互不信から、暗礁に乗り上げようとしていた「駅本通りの拡幅事業」について、双方の仲立ちをし、その後の「まち」の具体的将来像を探ることでした。

私たちのテーマは、単なる「商店会の活性化」や「地域おこし」といった一元的なものではなく、職住混在する地域特性や、自治会としての存在そのものが危ぶまれている「市内中心部の在り方」そのものにまで目を向けなければなりません。

しかし、幸いなことに、行政、各種団体、専門家、そして一般の方々まで、我々にとっては過分な程の御協力や御指導をいただき、ようやく今日に至った次第です。更に、全国至るところで見受けられ、津々浦々で試みられる活性化への努力を伝聞するとき、これは微力とはいえ、やはり我々が尻込みをしてはならないという「時代の使命感」のようなものを感じます。

この会は、ここで仕事をし、生活を営もうとする人たちにとって、既成概念にとらわれることなく、最も現実的で無理のない考え方やお手伝いをしたいと考えております。やがて、この「寺町のまちづくりを考える会」の輪（和）が、「寺町」から「白潟」へ、そして最後には「松江市」へと拡がってくれればと願っております。

平成八年八月三〇日
山陰中央新報より

出会いは、丁度良いときにある

「出会いは、丁度良いときにある」
モーリス・ベジャール（舞踏家）
の言葉。

『まちづくり』を始めて丸四年。月並みな表現だが、山あり谷ありの日々であった。勿論、ゴールまで未だ十年以上は優にかかるであろう。ただ、やっと踊り場にさしかかったのか、時折、後ろを振り返える余裕もでるときがある。そんなとき、必ずといってよいほど冒頭の言葉を思い出す。

我々の会は、松江市の駅本通り商店会の若手経営者を母体に、地域の方々の参加を募り、一九九四（平成六）年に発足した。

しかし、その前年から、地域の中心を貫く駅本通りの拡幅事業と、周辺再開発事業の計画が発表されており、それらへの対応を機に、必要に迫られて勉強会はすでに繰り返されていた。

松江の中心街はご存じの通り、江戸時代に完成した町並みが、戦災を免れそのまま残っている。戦後の発展も、周辺郡部の合併による伸長が主で、中心部の抜本的な改造は取り残され、やっとこの頃、緒に就いたばかりといっても過言ではない。我々が生活を営む『寺町』も、二十数件の寺社に鍵の手、小路の入り組んだ道路、商家と民家の混在する町並みを、JR松江駅と宍道湖を結ぶ駅通りが、まるで「地図の上で線でも引くように」無頓着に、ためらいもなく貫通している。車社会の伸展と社会生活の激変は、この置いてきぼりを喰った地域の空洞化にも拍車をかけた（このことは後々、地域の大型商店施設が、立て続けに三つも撤退し始めた遠因ともなる）。

さて、そうした都市問題解決と県都の顔作りの政策のひとつとして、官主導で計画、浮上したのが拡幅事業と周辺再開発事業であった。

戦後五十年、社会、世代の節目の時期としては、丁度良い頃合であった。けれど、人間が一生に一度出合うか否かという、立ち退きや補償交渉まで含む『将来のまちづくり』は、温和な地域の人には、些か酷な仕事でもあった。また、ご他聞に漏れず、事業の途中につきものの誤解や説明不足は、官民の不信感を生み、未だ影響が一部に残っている。

こんな中、すべての事業が水泡に帰そうとしたとき、高所、大所の立場を訴えて我々の集まりは始まった。幸い、地域の方々の信頼、行政の側の忍耐に支えられ、やっとここまでやってこれた。そして、改めて感謝し、数奇に驚くのが、やはり『人との出会い』の妙なのである。

地元の若手中心メンバーは、ほとんどが学生時代を含め東京等の都会の暮らしを満喫してきた。その後、大なり小なりの挫折や屈折を胸に帰郷した彼らは、その頃は地元の生活や仕事にも慣れ、丁度、いくばくかの自信と余裕を持ち始めていた頃であった。もともと遊びっ気の多い彼らにとって、やがて来るであろう新しい体験は、不安な反面、好気心の絶好の対象であった。

我々を取り巻く行政の士には、高い見識と何よりの寛受の精神の持ち主が点在した。我々を導くコンサルタントには、自我を抑え、相手を包み込む懐の深い人に恵まれた。そして何よりも、地域の多くの方が、不分明な未来に対し、我々の言葉に耳を傾ける、心に余裕のある人ばかりであった。

地域の生活を支える大型商業施設の相次ぐ撤退は、遅れた都市政策を露呈し、全市を挙げての抜本的な解決を促した。細かなことを言えば、遠隔の神戸の震災さえも、地域の旧耐震構造の大型施設の立て変え方針や防災意識の高まりまで生んだ。

才能のない新劇役者上がりの自分には、かつて地方公演の度ごとに出合った日本中の町並みや、常打ち小屋のあった渋谷公園通りの周辺の推移を見続けた体験が、貴重な財産となり、柄にもなく、使命感さえ感じさせた。ただの活字の羅列（台本）が、やがて人間臭い総合芸術（舞台）を生み出す現場で培ったプロデュースの経験は、ものを温める寛さも教えてくれた。

『どんな長い夜も、必ず明けるのだ。（マクベスより）』―当時、出会ったシェイクスピア翁までが、不思議に今を励ましてくれるといっては、笑われるであろうか。

（寺町のまちづくり考える会
事務局長　錦織伸行）
平成九年一月二十八日
島根日々新聞より

制作　有限会社ヨネザワ写真館　松江市寺町179（新大橋アーケード街）　TEL 0852-21-6542(代)　FAX 0852-24-3830
印刷・製本　関西美術印刷株式会社　TEL 0742-62-3000